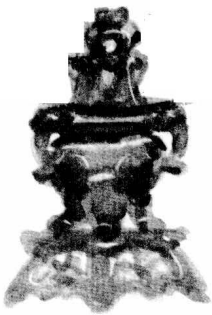
# 四角な船

井上 靖

# 四角な船

井上靖



新潮社版

＊本文中引用詩
阪田寛夫「サッちゃん」
与田準一「ことりのうた」
さとうよしみ「いぬのおまわりさん」
日本教育音楽協会「こいのぼり」
（日本音楽著作権協会承認番号第471337号）

© Yasushi Inoue, 1972,
*Printed in Japan.*

四角な船

定価六〇〇円

昭和四十七年七月十五日　発行
昭和四十七年九月十五日　四刷

著者　井上靖

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一　電話
東京二六〇―一一一一　郵便番
号一六二　振替東京八〇八

印刷所　塚田印刷株式会社
製本所　神田加藤製本所

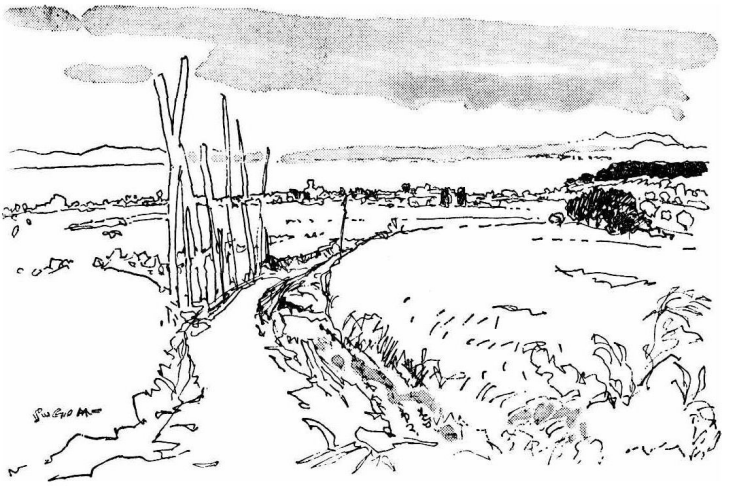
〈落丁・乱丁本はお取替えいたします〉

# 四角な船

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

湖畔の村　5
しらゆう花　39
凪　77
陽だまり　114
古代文字　151
月光　187
幼い虎　216
焔　247

装画・挿絵　杉　全　直



# 湖畔の村

R新聞社の社会部記者丸子東平が、ノアの洪水の到来を信じている狂人の話を耳に入れたのは、九月にはいったばかりの、ひどくむし暑い日に開かれた大学の同窓会の二次会の席においてであった。

同窓会は工業会館の三階で開かれ、四、五百人ほどの、年齢も職業も違う男たちがかなり広い会場を埋めつくしたが、丸子たちはその方は頃合を見はからって退散し、同年に卒業した同じ社会学専攻の者たちばかりで、築地の二流級の料亭において二次会を持った。遠慮のない若い連中十二、三人だけの集りであった。

「忘れないうちに会費を集めておく。二千五百円ずつ出せ」

学生時代にも、こうした場合いつも世話役を勤めた者が、相変らず今も幹事役を引き受けていた。丸子は五千円紙幣をその方に出しながら、

「面白いな、それは」

と、卓にむかい合って坐っている田代光太郎の方に言った。
「こまかいのはないか」
幹事は言った。
「ない」
その方にはうわの空で言っておいて、再び田代の方に、
「面白いな。その人物はちょっとしたものだよ」
「ちょっとしたものだと言っても、もちろん狂人だぞ」
「狂人だから面白いんだ。——人類の絶滅を信じている。ノアの洪水がやって来ることを信じている。その時に備えて、ハコ船を造っている。——面白いな、立派だよ」
それだけ言うと、丸子東平はぷっつりと言葉を切った。一座は賑やかだった。むかい合っている同士が、勝手に自分たちだけの話をしている。旧師の話、旧友の話、職場の話、——話に夢中になっているくせに、申し合せでもしたように、ビールやウイスキーの水割のグラスを口に運ぶ手は休めていない。二次会に顔を出すのは、大体において、酒ののめる連中である。それに年齢から言っても、三十歳前後、それぞれ職場にはいって五、六年といったところであるが、こうして学生時代の友達だけが顔を合わせると、すっかり元の親の臑かじり時代に戻ってしまう。
「丸子、おい、新聞記者！」
誰かの声が聞えたが、丸子はふいに我に返ったように、
「大津からタクシーで行けるか」
と、また田代の方に言った。
「大津から車で、どのくらい時間がかかる？」
「お前行く気か」
田代は呆れたような顔をして、
「断っておくが、俺も聞いた話なんだ。その狂人に会ったわけでもないし、そのハコ船という奴を見たわけでもない。俺の末の妹が友達の誰からか聞いてきた話なんだ。責任は持たんよ。何でも近江の比良山の、南だとか、北だとか、よくは知らんが、そんなところらしいな。鶯という苗字だけは憶えている。奇妙な苗字だからな。鶯家と言えば、その地方きっての素封家で、近郷近在では誰知らぬ者のない旧家らしい。と言って、もちろん、これも聞いた話だが、ね」
田代は慎重な言い方で言ったが、それにお構いなしに、
「いや、面白いよ」
丸子は言った。
「面白い、面白いと言っても、俺は知らんぞ。訪ねて行っても、面白くないかも知れん。ただ、そういう狂人がいるという話を聞いただけなんだから、ね」
田代は言った。この席で官吏になっているのは田代一人

だが、職業は恐ろしいもので、わずか四、五年の間に官吏らしい用心深さを身につけている。

そこへ多少酩酊している今年からどこかの大学の講師になったというのが割りこんできた。

「なんだって？　まださっきの狂人の話の続きをやっているのか。新聞記者というのは仕様がないものだな。丸子、お前、それを記事にするつもりなんだな。そういう了見では、いつまで経っても出世できんぞ」

「うるさい奴だな」

丸子はきめつけた。そして、

「お前はあい変らず舌が回らん。ラ行の発音がだめだ。ラ、リ、ル、レ、ロと言ってみろ。それでよく講師などがつとまるな。とにかく、うるさいよ。向うに行け」

相手の言ったことが癇にさわったのか、丸子の言い方には、ある烈しさがあった。

「なに言うとる！　おこるな、東平！」

相手が丸子の肩に腕をまきつけようとすると、邪慳にそれを外して、

「しつこいよ、お前は――向うへ行っていろ」

こんども、丸子はつきはなして言った。そこへ、また、別のひとりが割りこんできて、

「狂人の取材はいかん。そもそもそういうものに興味を持つことがいかん。どんなに取扱っても狂人は狂人だ。日本の新聞のいかんところだ。くだらん興味で読者を釣ってはいかん」

「何を言っていやがる」

丸子は言った。そして眼を光らせると、

「いいか、忘れはしまいな。お前は新聞社の試験を受けておっこちたんだぞ。俺ははいったが、お前はおっこちた。お前に新聞を批判する資格はない。シャボンを売っていればいい、シャボンを。――シャボン会社の社員だろう、お前さんは」

「何を威張っているんだ」

ほかのがやって来て言った。うるさくなったので、丸子は立ちあがった。

丸子東平は二次会の席から引き揚げたくなっていた。自分でも、自分が憤りっぽくなっていることが判った。こんなことはめったになかったが、どうもいつもの自分とは違っているようである。この二次会の席にやって来るまでは、あとで何人かを二、三回行ったことのある酒場に引張って行こうと心組みしていたのであるが、それも今は面倒くさくなっていた。

丸子は席を反対側の隅の方に移していたが、そこから田代の方へ視線を投げた。田代だけを連れ出して、何となく

この席から姿を消したかったが、その田代が上着を脱いで、でんと腰を据え出したのを見ると、それも諦めなければならなかった。

丸子は席を立つと、廊下に出た。トイレットに行くつもりだったが、廊下に出たとたんに、このまま帰ろうという気になった。

「あら、お帰りですか」

女たちが二、三人出て来た。

「少し気分が悪いから、さきに帰る」、

丸子東平は靴を履きながら言った。

料亭の建物を出ると、銀座の方へ歩き出した。銀座に足を向けても、これといって行くところがあるわけではなかった。ただ、ひとりで歩いていたかった。まだ九時を少し回ったばかりの時刻で、人は出盛っていた。雑多な種類の人間が歩いている。そうした人の流れの中に芸者と見れる女も居れば、酒場の女も歩いている。

芸者はひと眼ですぐ判った。腰から上をまっすぐに立てて、こまたに足を運んでいる。腰から下だけが動いて、上体はそれにつれて移動している感じである。絶対にきょろきょろしないで、前方だけを見て歩いているところはみごとである。

上体をまっすぐにし、よそに眼を移さないで歩いて行くところは酒場の女たちも同じである。着物の着方は、襟を芸者ほどぬかないで、余裕がないほどきちんと前で合わせている。帯のおたいこの結び方にも独特のものがあり、それが腰のすぐ上にのっている。

芸者や酒場の女たちの歩いて行く姿には、意識したものが感じられる。自分はあなた方家庭のご婦人たちとは違いますよ、といったつんとしたところがある。そうした言い方をすれば、今夜の丸子東平も多少意識した孤独というか、孤高というか、そうしたものを持って歩いていた。周囲の有象無象たちとは少し違うんだといったところが、気持の中にあった。が、丸子の場合、そうしたところは他の誰にも判らなかった。丸子は平生よりむしろふらふらと頼りない歩き方をしている。少くとも颯爽としているとは言えなかった。

丸子東平は時々立ち停まっては、店の飾窓を覗きこみ、それからまた歩き出す。飾窓を覗いても、そこに並べられてある品物に眼を当てるわけではない。ただ漠然と明るい硝子の向う側を覗きこむだけのことである。頭はすっかりほかのことに占領されてしまっている。

丸子東平の思念はさっきから同じところを堂々回りしている。インタービューしたら面白いだろうと思う。相手はこの世の滅亡を信じている人物である。相手に会って話を



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

聞く。ノアのハコ船まがいの船を見せて貰う。そしてその写真をとる。しかし、まあ、写真の方は二の次である。重要なのはインタービューだ。当人の口から、大洪水の到来を信ずるに到った動機と、その信念がいかにして胚胎したかを聞く。

さっき二次会の席で、誰かが小生意気なことを言ったのを思い出す。興味本位の取材はいかんとぬかしやあがった！　誰が狂人を興味本位に取扱ったりするものか。しかし興味本位には取扱わないが、相手の語ることが面白からぬ筈はない。なにしろ四六時中、大洪水の幻覚の中に生きているのだからな。

ずいぶんインタービュー記事も書いてきたと、丸子は思う。この夏だけでも、フランスの映画俳優と、ドイツの音楽指揮者に会っている。が、そんなのに会って、何をきき出しても、そのしゃべる内容は知れたものである。言うことは、会わない前から判っている。さきに記事を書いておいても、たいして訂正するには及ばない。そういうリボンで結んだお遣いもののような記事とは、こんどの場合は違うのである。一行の予定記事も書けない。相手は予想もつかぬ大洪水の幻覚の中に生きているのである。何を言い出すか見当はつかないし、どういう会い方をしていいかも予想はつかない。だが、一人の狂人が大真面目に語り出す洪水物語は素晴らしいに違いない。素晴らしからぬ筈はない。一体、いつ洪水はやって来るのか、どのような形でやって来るのか。そうしたところから語り出して貰う。いや神の声を聞いたところから始める方がいいかも知れぬ。いや、それより——。

丸子東平は誰かとぶつかりそうになった。右によけて通りすぎようとすると、

「おい、丸ちゃん」

相手から声がかかった。同じ年に新聞社にはいった瀬宮二郎が立っていた。

「なんだ、お前か」

「ご挨拶だな」

瀬宮は言って、煙草にライターで火をつけた。

「いやに深刻な顔をして歩いているじゃあないか」

瀬宮二郎は言った。丸子と違って身だしなみのいい恰好をしている。

「どこへ行く」

丸子が訊くと、

「いまアルファに行ってきたところだ」

瀬宮は言った。アルファというのは新聞社や雑誌社の連中が溜りにしている小さい酒場の名である。

「いいところで会った。話がある。もう一度アルファにつ

き合えよ」
「ほかにしよう。一度出たところへ舞い戻るのも、な」
それから瀬宮はちょっと考えていたが、
「話があると言ったな」
「うん」
「じゃ、どこかへ行こう」
と言って、さきに立って歩き出した。
丸子が連れて行かれたのは、同じ西銀座の地下の酒場だった。アルファに較べるとずっと大きい店の構えで、調度類も立派である。
「よくこんなところを知っているな」
「お前とは違うよ」
瀬宮は言った。同期の入社であるが、瀬宮は社会部記者を二年やって週刊誌の編集部に回されている。こういう酒場を知っているのは週刊誌に移ったおかげだろうが、しかし本人は、何となく雑誌の編集に回されたことに釈然としないものを持っている。
二人は隅の席に陣どった。瀬宮は二人のところに集って来る女たちに、
「話があるので、五分ほど二人だけにしてくれ」
と言った。年齢の割にはこういうところは手馴れている。ウイスキーを水で割ったグラスが卓の上に運ばれてくると、
「一体、なんだ、話って」
と、瀬宮は少し改まった恰好で訊いてきた。
「俺に一度お前のところの雑誌のトップを書かせろ。と言って、お前に権限はないから、編集長に売込んでくれ。本当は新聞の方がいいんだが、今のところそういうものを取扱う場所がない。多少もったいないが、お前の方に回す」
「――なんだい、それ」
「今夜たまたま耳に入れたんだが、琵琶湖の湖畔のある村に、真剣にノアの洪水の到来を信じて、その時の用意にハコ船を造っている人物が居る。――狂人だがね」
「そりゃ、狂人だろう」
「それを取材したら面白いと思うんだ。お前のところの雑誌にはぴったりだ。同じ狂人でもこういう狂人は滅多にない。第一スケールが大きい。大洪水が起きて、人類が絶滅するんだからな。彼はやがて、その時の来ることを信じている。信じていればこそ船を造っている」
「どんな形の船だ」
「だから、それを写真に撮ってこようと言うんじゃないか。普通の船とは違う。何しろ大勢乗るんだからな」
「何人ぐらい乗るんだ」
瀬宮はまた訊いた。
「だから、それを本人に会って取材しようと言うんじゃな

いか」
丸子東平は空になったグラスを遠くにいる女たちの方へ振って見せた。
「本当にそんな船を造っているのかなあ」
瀬宮二郎は信じられぬといった面持で言った。
「造っている」
丸子東平が言うと、
「見てきたわけじゃあるまい」
「だから、たまたま今夜耳に入れた話だと言ったじゃないか。近頃これだけニュース・バリュウのある話はあるまい。痛快じゃないか。お前のところの雑誌など、他人のスキャンダルを取りあげるか、スキャンダルまがいの種ばかりあさっている。社会面で一度書いたものを、もう一度取りあげるのが関の山だ。そんな記事ばかりじゃないか。まるで新聞の社会面で雑誌を作っているみたいなものだ。社会面に依存しちゃあいかんよ、社会面にな。雑誌は雑誌独自の立場でやれ」
「俺に言ったって仕様がないよ」
「仕様がないのは判っている。編集長に言え」
「いや、有難う。——編集長に、編集方針を変えろと言うんだな。それについては、時に、こういういい材料がある、狂人が人類絶滅の大洪水に備えて、ハコ船を造っている、それを取扱ったらどうだと言うんだな」
「そう」
「編集長の答はきまっているよ。そりゃ面白い。五、六行の気のきいたゴシップとして書け」
瀬宮二郎は笑った。
「ゴシップ!?」
「俺が言ったんじゃない。編集長の代弁しただけのことだ。編集長なら、こう言うだろうと、俺が替って言っただけのことだ。——おこるな」
「おこりはしないよ。だが、お前、これを本当にゴシップ種だと思うか」
「まあ、ね」
「そういうところが、お前のだめなところだ。ゴシップにしてみろ。それを読んで、すぐほかの週刊誌が取りあげるよ。ほかの週刊誌に材料を提供するようなものだ。さっそく女優か何かを連れて行って、そのハコ船に乗せて、見開き二頁のグラビアにするだろう。そして狂人に、やがて来る洪水について語らせるだろう。それにひっかけて、大学の教師にノアの洪水伝説について解説させる。牧師を登場させてもいい」
「大学教授や牧師がまともに話すかな」
「そりゃあ、話すさ。ひとりの狂人が大洪水の到来を信じ

ていることは事実なんだからな。ハコ船を造っていることも事実だ。れっきとした社会的事件だ。そうだろう」
「うむ、ね」
瀬宮二郎はここで、ちょっと遠いところを見るような眼をした。
それからどれだけの時間が過ぎたのであろうか。丸子東平は、いつかひどく花やかなものに取りまかれている自分を見出した。どうしてこのようなことになったかわからないが、大勢の若い女たちが、お花畑のように、そこらにいっぱいちらばっていて、その間に自分がはさまれている。
「お船、造っているんですって？」
そんな声が聞えている。冗談じゃないと思った。
「俺が造ってるんじゃない」
丸子が言うと、
「いいじゃないの、匿さなくても。ねえ、教えて！　どのくらいまでできてるの？」
とか、
「帆船なんでしょう、それ」
とか、いろいろな質問のつぶてが降ってくる。
「わたしも乗せて！」
「君はだめだ」
「けちね、乗せるぐらい乗せてくれてもいいじゃないの。お炊事ぐらいしますわよ」
「女はだめだ」
「あら、男だけ？　じゃ、子孫が絶えてしまうじゃないの。やはり女を乗せなくちゃあ」
「じゃ、ひとりだけ乗せる」
そんなことを言いながら、丸子東平は瀬宮二郎の姿がないことに気付いた。
「どこへ行った、相棒」
「お電話。——さっきから何回もお電話かけに行っています」
「居ればいい」
それを合図に、また瀬宮二郎の存在は、丸子東平の意識の中から消えた。丸子はハコ船に乗せる女をこの中から選ぶとすると、だれにしようかと思った。ひとり選びたかったが、肝心の顔の輪廓がはっきりしていず、どれも同じように見えた。
「だめ、そんなに安請けあいしたら」
とか、
「もう五人よ、これ以上乗せたら沈んでしまいますわよ」
とか、そんな声が、時々丸子の耳にはいってくる。瀬宮二郎が、向い側の席に居ることもあれば、居ないこともあった。遠くに見えたり、近くに見えたりした。

丸子東平は席を立った。正確に言えば席を立たされたのである。瀬宮二郎の腕が自分の腕に搦みついているのを、丸子は発見した。階段をあがった。いやに長い階段である。

「確りしろよ。だから、俺は酔っぱらいは嫌いなんだ」

瀬宮二郎のそんな声が聞えるが、丸子にはそれが誰に対して言われているかはっきりしなかった。銀座の夜更けの舗道に出た瞬間だけ、丸子東平は正気に戻った。

「どうした、ハコ船は？」

「今話しても判らん、あとで話す。お前の場合はハコ船でなくて、サケ船だよ」

瀬宮二郎のそんな声を最後に、丸子東平の意識は再びもうろうとしたものになって行った。

翌日、丸子東平はふつか酔のはっきりしない頭で出社した。ふつか酔の頭で考えてみると、ゆうべの自分は少からず異常だったと思う。折角の親しい者の集りを途中で引き揚げたことも普通ではないし、あんなにノアの洪水にとりつかれている狂人に夢中になったのもただ事ではない。田代光太郎の口から狂人の話を聞いた瞬間から、どうやらほかならぬ自分の方がおかしくなってしまったようなものである。

丸子東平は、ふつか酔の日はいつもそうであるように、つくづく自分という人間は愚かな奴だと思った。同窓会の連中は、途中から姿を消した自分に対し、さぞ不愉快な感情を持ったことであろうと思う。自分が消えてから、当然なことながら、自分に対する批判が乱れ飛んだ筈である。

——新聞社にはいったら、あいつ、鼻持ちならぬ人間になってしまやあがったな。

——何だい、丸子の今夜の態度は！　これからあいつだけには声をかけないことだな。

——ノアのハコ船が何だとか言っていたが、少し頭がどうかしているんじゃないか。

——もともと、あいつには変なところがあったよ。他人をこばかにして、うそぶくところがあった。

——大体、失礼だよ。俺のことをシャボンを売っていればいいんだろうとぬかしやあがった。そりゃ、シャボン会社に勤めているんだから、シャボンも売るさ。

丸子東平には二次会の席に居た友人たちのいろいろな声が聞えた。いくら耳をふさいでも、これでもか、これでもかというように友人たちの声は聞えて来た。田代光太郎の声も聞えてくるし、シャボン会社の社員の声も、大学講師の声も聞えてくる。

ふつか酔の日は、いつもこうである。世の中のあらゆる人間が、自分に背を向けて歩いているような気がする。酒

がいかん、酒がいかん！　酒を見たら、親の仇と思うことだ。禁酒、――これ以外に、自分を救う道はなさそうである。もう決して酒場にも、いっぱい飲み屋にも行かないことだ。

丸子東平はすっかり神妙な気持になっていた。社会部の同僚からコーヒー店に誘われたが、それも断った。コーヒーの色を思い浮かべただけで胸がむかむかした。もちろん仕事の意慾はない。社会部の席の隅の方でぼんやりしていたが、厄介なことに絶えず電話のベルが鳴ってくる。受話器を取りあげるのもおっくうである。そうしている時、瀬宮二郎から電話がかかって来た。

「――あ、あ、あ」

と、ひどく熱のない声を出しながら、丸子東平は受話器の奥から聞えてくる瀬宮二郎の声を聞いていた。

「ゆうべ、無事に帰れたろうな」

「あ」

「ひとの奢りだと思って、豪勢に飲みやがったな」

「あ」

「ゆうべのことは何ひとつ憶えていないだろう」

「あ」

「お前が酔っ払っている最中、俺は編集長の出先を調べて、そこに電話をかけたんだぞ。もちろん、お前のためにだ。恩にきろよ」

「あ」

「ゆうべ一応編集長の耳に入れておいて、さっきの部会で持ち出してみた。そうしたら、それで行こうということになった」

「それで、とは何だ」

「ハコ船さ。みんなが、そりゃ、面白いだろうと言うんだ。特に編集長が乗気なんだ。断っておくが、もちろん、俺の売りこみ方がよかったからだ。すぐ取材にかかってくれ」

「うむ」

「もう一時間ほどしたら、俺のところに来てもらいたい。打合せをする。とにかくすぐ行って貰うことになると思うんだ」

「行くって？」

「現地へ、さ。琵琶湖の湖畔だったな」

「だが、俺だって、仕事がある」

「ゆうべ、いつでも都合つけると言ったじゃないか」

「そうかな」

「そうかな、とは何だ。いまになって変なことを言われては、俺が困るよ。売りこめと言われたんで、売りこんだんだからな。俺も、ゆうべはそうは思わなかったが、確かに君の言うように面白いと思うんだ。同じ狂人にしても、け



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com